

足を運び、ボランティアの方々と挨拶を交わしたり、走り回って喜んでる子どもたちの笑顔を見るうち、行政がこういう場をしっかりと提供していかななくてはならないと思いました。また、多くの人が『水都大阪2009』で人と人のつながりの大切さを学んだことでしょう。その後、中之島ではじめた物産市『大阪マルシェ』では、買いもの楽しさや客と売主のコミュニケーションを通して、人々の生活に豊かさを与えていると思います。私は、こうしたことこそが、街場での学びだと考えています。行政としてはお金のかかる話に応えるのは難しいですが、私は大阪市長として、こうした場を提供できるよう、さまざまな規制で融通のきかない市役所の体質も変えていきたいと思っています。

産学官民一体となった場づくり

堀井 後半は来場者からよせられた質問票に答える形でディスカッションを行いました。まず、「学生と社会人が一緒に講義を受ける効果」や「大学生のコミュニケーション力低下」について、質問が来ています。

奥野 学生同士のグループで勉強させたら、「僕にも友だちができることが分かった」という感想が返ってきて驚きました。それは授業の目的ではないけれど、それで学びのスイッチが入れば良いかなと思います。シニア層と学生では、違いがありすぎてインターアクションは起きません。

金水 昔ながらの大学市民講座は、高齢化と固定化が進んでいます。若い世代は、インターネットですぐ情報が得られるのに、自ら出向いて金を払って受ける講義に魅力を感じないのでしょう。そこで大学の知術を開放し共有するためには、カフェスタイルの雑談風授業も必要だと考えます。インターネットなどでは得られない現場感やフラットな人間関係の中から、創造的な発想も生まれてくる。そうした場づくりを目指しています。

定藤 社会人大学院では、産業界の実態を知るために企業経営者も講師に招きます。自分の仕事に関する知識しかない社会人学生が、異なる企業や異なる考え方の人と交わることで、クリエイティブな発想が生まれる。この意義は大きいと思います。

江 街場では、「どこで何を食べようか」と

「どうして金儲けをしようか」というような、消費と経済の2つの軸しかなくなってきているように感じます。また、経済合理主義によって、ファーストフード店のように客とのコミュニケーションを排した店舗が増える一方、コーヒー一杯で長時間楽しめるカフェ的な場所が、どんどん姿を消しています。ナカノシマ大学では昨年、中央電気倶楽部の大食堂で2000円・ワンドリンク付で、講師の旭堂南海さんと浪曲師の春野恵子さんを招いて聴き比べをしました。今、街場では、こうした人と人がゆるやかにつながるためのプロデュースが必要でしょう。

奥野 江さんや小原さんが企画されているように、大学が外に出ていくことも大切です。とはいえアカデミックな部分も保たなければならない。市民公開講座では、レベルの高いシニア層のニーズにも応える必要があります。

学びによって生きる力をつける

小原 200DOORSが大学の公開講座と異なるのは、アカデミックなこととは関係なく、ちょっとした好奇心に応え、楽しめることを最重視していることです。面白いと思ったら、さらに市民講座やカルチャーセンターに通われるのもいい。そのための踏み台のようなものです。また、DOORSが開催できるのは、ワークショップコーディネーターがいるからこそ。現在、専門の養成講座を受けられた方々が30人以上がおられます。仮にひとりのコーディネーターが5つのワークショップを持てば、100人で500のワークショップができる。だから1000DOORSも夢ではないのです。

堀井 コミュニケーションといえば、音楽を聴いた後でアーティストと交流できるような場があればいいですね。

木田 じつは『朝の光のコンサート』の後にそうした交流の機会をつくりたいのですが、大阪市中央公会堂の午前中使用は12時までで、それを過ぎる場合は、午後の使用料を全額払わなくてはなりません。1000円の入場料という低予算のコンサートですので、1時間だけ小割で貸してほしいといっても規則で認めてもらえません。また、最近

たちには無料で聴かせてあげたいと思うのですが、教育委員会に何度掛け合っても挫折するばかり。せめてこれだけはなんとかしていただきたいです。

金水 アートエリアB1というカフェプログラムを京阪電鉄中之島線のなにわ駅コンコースで実施していますが、ここは行政上道路にあたるため、物を販売できません。最近は自動販売機が置けるようになりましたので、やっとカフェらしくなりました。こういうことも大事ですね。

定藤 文化力を高めるためには、経済的な活力が不可欠だと思います。経済力が弱くなったので文化力で生き残ろうというのはおかしい。社会人大学院は経済界が主体的に関わっていますが、行政も、大学・大学院施策として、経済活性化の元になる人材育成に取り組んでほしいと思います。

平松 皆さんのご意見を参考にさせていただきたいと思うと同時に、大阪の企業をまず元気になりたいという思いがあります。行政は学びの場を提供する一方で、大阪にはこんな社会貢献をしている企業や大学があるということを、ちゃんと名前を上げて発信していいと思います。それをするのが大阪市の役割だと思います。

堀井 大学と社会の連携や、200DOORS、ナカノシマ大学のような自主企画としての学びの場など、さまざまな角度で“まちでの学び”が展開されているのが分かりました。思えば懐徳堂とは、元禄バブルが弾けて将来に不安を抱いた町人たちが、学びによって時代を生き抜く力をつけようと興したものです。石田梅岩の心学もしかり。今また不安定な21世紀を迎え、生きる力を一人ひとりが学びによって身につけていく必要があるのだと思います。ありがとうございました。

第1分科会

